

東海・関東地域の徐福情報について

前田 豊 Yutaka Maeda

1. はじめに

日本の古代史は、八世紀の史書「古事記」「日本書紀」(記紀)に記載されているように、神話から始まっている。しかし、近年の歴史研究者の検証によれば、その内容に多くの矛盾があることが指摘されている。

一方、中国史書「史記」には、今から約 2220 年前、秦始皇帝の命を受けて、方士「徐福」が蓬莱の島を目指したことが記載されている。最近日本でも徐福集団が日本の弥生時代の文化を深化させたと考えられるようになってきたが、これらのことは「記紀」には全く触れられていない。

ところで、歴史的事実や現象を証明するには、科学的取扱いが要望される。科学的取扱いには、通常仮説を立てそれを検証する方法が取られる。しかし、歴史的事象は検証実験、すなわち再現が不可能である。そこで歴史的事象の検証は、文献学的検証と考古学的検証が採られるが、考古学的検証(物質的証拠)も結局、研究者の推論による物語の構築に頼らざるを得ない。

本報論者は、不思議な経緯で、東海地方の東三河や関東・相模の郷土史を、一級資料ではないが、伝承や民話、神社由緒記録等を通じて研究するうち、日本神話に登場する神々が、徐福集団に関連すると思われる事績や伝承を多数発見することになった。

そこで本報では、東海、関東の伝承・民話を含む郷土史研究をベースとし、富士古文書などの古文書情報と記紀神話を総合して、徐福の日本渡来による文化的現象を仮定し、その隠された存在形態を考察してみる。尚、歴史的推論の根拠が、地方の歴史書、古文書、伝説(言い伝え)、民話などを含むが、真実性の度合いに多寡があるとしても、それなりに意味があるものと思っている。

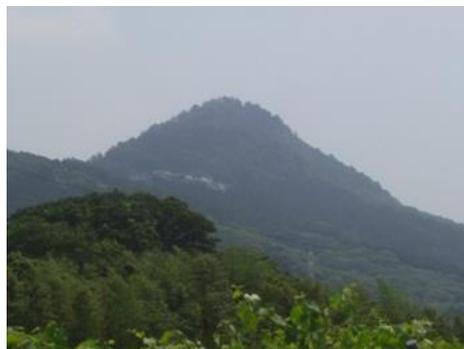
2. 東三河の古代史

2.1. 東三河の石巻山は日本のピラミッド(蓬莱山)¹⁾(仮説1)

筆者は、仕事の関係で 1983 年に愛知県東三河の豊橋市牛川町に住むことになったが、この地域の古い家の多くが玄関前に、正月につける注連飾りを年中かけていることを知った。これは島根の出雲市でも同様である。東三河の山々や神社仏閣を巡る内に、この地域

の郷土史を調べてみようと思いはじめた。

まず、牛川町には、嘗ての東大教授・鈴木尚氏の鑑定により 16 万年前の人骨が発見されたという「牛川原人の碑」がある。その近くに不思議な尖がり山「石巻山」が存在し、「神山」と呼ばれていた。周囲の地に縄文土器や弥生式土器が、多数発見されており、古墳も数多く存在する。この地域には、日本古来の人々が暮らしてきていたことが、明らかに感じ取れた。



尖り山・石巻山

調査の手始めに、石巻山の素性を知る必要がある。1990 年代に入って、秋田県大湯近くに黒又山（クロマンタ）がピラミッドであるという説が持ち上がり、作家・鈴木明氏が中心になってこれを取りまとめた。日本のピラミッドの条件としては、1) 断面形状が三角形のピラミッド状で、2) 頂上に祭祀用の磐座を有し、3) 周囲に遥拝所である神社や祭祀場をもち、4) それが東西南北を含む特定の配置を成している、ということであった。

石巻山について、このような「ピラミッド」要件を満たしているか、筆者独自に調査を行った結果、山容は三角断面形状で、主峰に磐座をもち、環状配置の神社群という遥拝所を有したピラミッド（蓬莱山）と呼ぶに相応しいものであることを結論付けることができ（**仮説 1 の証拠**）、名古屋郷土文化誌に投稿して掲載された。石巻山ピラミッド説の発見は、謎の日本古代史発見につながる入口であった。蓬莱山は徐福が求めた地の一つと考えられ、徐福一行は、各地の尖り山に上り、国見をして麓に入植した²⁾（**仮説 1 の証拠 2**）。

2.2. 東三河は徐福伝承の地¹⁾（仮説 2）

石巻山周辺で、三角断面が最もきれいに見える所に、牛川稲荷神社が存在した。そこには不思議な立石群が林立し、多くの大神や、童子の名が彫られていた。その中に「保福大神」という大神様の名が刻まれた碑が存在していた。「古事記」、「日本書紀」には現れない、不思議な大神様！と注目をしつつも、しばらくは神様の素性が判らなかつた。

1992 年ごろ、飯野孝宥著『弥生の日輪』という書物が刊行された。そこには秦の始皇帝を欺き、蓬莱の島に大船団を組んで船出した「徐福集団」が日本列島到着し、定住したということが記されていた。その時「保福大神」とは「徐福大神」ではないかとの仮説が生まれた。「保」と「徐」は字が異なるが、手書きだと殆ど差がない。

その後、東三河の小坂井地区には、徐福上陸の伝承があり、菟足神社の由緒書きにはそ

のことが書かれていることを発見した（仮説2の証拠1）。また、牛窪町には『牛窪密談記』という書が存在し、「徐福」と「イザナミ尊」が併記され、その子孫が東三河に来所し、住みつき、富栄えていたと記載されていた（仮説2の証拠2）。また、牛川稲荷神社の氏は、徐福一行の子孫であると伝えていた（仮説2の証拠3）。この地にはナギの木が神木として、神社仏閣で大事に育てられていたのである。

2.3. 東三河は古代に繋がる神都・蓬莱国か¹⁾（仮説3）

不思議なことに石巻山は、この地で「三輪の元山」と呼ばれ、三輪山、三輪川、美和の名がつけられていた。奈良の巻向の大神神社の官司は、今も豊橋出身の人と言われている。石巻山の麓を流れる三輪川には、『古事記』に説話として述べられた、雄略天皇が若い娘を見初めたという「アカイコ伝説」が存在していた。出雲神社があり、大社が存在していたと豊橋市誌に記載されていた。

東三河の山間部には、「花祭り」という霜月祭りがあり、スサノオ神が出てきて、ここは高天原だと歌っている。鳳来寺山があり、利修仙人という仙人がいて、当地に滞在された文武天皇の病を祈祷で治したと伝えられている。

鳳来寺の主仏は、薬師如来、神農、大国主命で、古代中国の地誌文献「山海経」にも触れられた鳳凰の飛び交う「扶桑の国」、不老不死の霊薬の育つ仙人の住む「蓬莱の国」である（仮説3の証拠1）。

本宮山麓の豊川市には、三河一宮「砥鹿神社」があり、御神体山の本宮山に「神の始めの神」と称される大元祖の神が住んだ神山との伝承がある。大国主尊が国見をして、麓に国造りを行ったという謂れをもつ国見岩がある。周辺には、ニギハヤヒ命を祀る神社が多い。また、この山には、岩戸神社とアメノウズメウズメを祀る神社があり、その下麓の道には、八街（ヤチマタ）と彫られた石碑が立っている（仮説3の証拠2）。

本宮山の東北部にある新城市には大宮・大ノ木遺跡があり、石棒を含む非常に特殊な祭祀場が発見されている。上質のひすい（糸魚川産）の飾りものが発見された。

この地区には石座（いわくら）神社があり、天御中主神と天稚比古尊（皇大神ともいわれている）を祭神とし、3種の神器に相当する鏡・剣・まがたまの首飾りが保管されている。『記紀』で、高天原の宮田（天照大神が高天原で五穀を栽培し始めたといわれる良田）と呼ばれた地名、「安田、長田、京田」、天サカルムカツヒメ（天照大神）の「住居田」や天の「安川」、「高原」という地があって、天野姓の家が多数存在していた。まさに、日本神話（記紀神話）の舞台が、存在していたのであった（仮説3の証拠3）。

しかし、不思議なことに、「天照大神」を祀る伊勢神宮を再興された持統天皇が、大宝律令を発令される直前、1カ月に亘る三河御幸がなされた。そして、奈良帰還直後に崩御されている。このあたりに、真の日本の古代史歪曲の可能性がある（**仮説3の証拠4**）。

一方、豊川の東岸・八名郡賀茂町に天忍日命を祭る大伴神社が存在した。天忍日命は、久米軍団を率いて、ヤマトの国を形成した将軍であり、忍日命は道臣命とも倭宿祢とも呼ばれたという。砥鹿神社近くの豊川河岸の地（宝飯郡・豊津）の名称が、明治初期に「大和（やまと）」と名づけられたが、これは倭（ヤマトノ）宿祢に由来すると言われた（**仮説3の証拠5**）。海部氏勘注系図で、倭宿祢は神武天皇の役割を果たしたと言われており、豊川河岸に神武天皇の銅像が建てられた。因みに、石巻神社のご祭神は、神武天皇の兄のサビヒコ命である。

2.3. 考古学からみた東海地方

～弥生系渡来人・徐福集団の第2次入植地¹⁾～（**仮説4**）

弥生時代の水田稲作技術の伝達は、弥生時代初期、九州から尾張まで一気に広がったが、三河を境に東国に広がるのは、数十年遅れたといわれている（**仮説4の証拠1**）。

「日本人のはるかなる旅⑤」によれば、「突帯文土器の系譜を引く檜王式・水神平式土器が分布する三河の地域に、縄文系と渡来系の対峙する関係が存在した。

また、三河の条痕文側から遠賀川側への一方的な交流があり、東海以東への遠賀川様式の拡散については、関東や中部高地では、交流の通過点である三河地域で縄文スタイルが固持された結果、接触の機会は少ない。むしろ、三河の集団が、関東や中部高地へと広く影響を及ぼした。このことについて、森浩一氏は、その著書「東海学の創造をめざして」の中で「三河の土器は拡がりたがる。三河の土器が日本の各地に出現」と記載されている（**仮説4の証拠2**）。

事実、奈良ヤマト三輪山の麓の巻向遺跡近辺には、東海地方の土器が外部搬入で、最も多く、また、同地の前方後円墳と混じって、初期の古墳として、東海地方の前方後方墓が存在している（**仮説4の証拠2**）。筆者の調査では、神奈川県相模川東岸・綾瀬の遺跡には、東三河の土器が大量にもたらされ、東三河からの入植があったと思われる（**仮説4の証拠3**）。

考古学者・赤塚次郎氏は、「遺跡からのメッセージ」の中で、邪馬台国時代から初期大和王権の誕生に至る過程において、東海地域が大きく関与している！と記載している。

3. 徐福伝承地としての神奈川（相模）

3.1. 神奈川県に存在した徐福伝承³⁾（仮説5）

神奈川県にも、徐福伝承がいくつかある。これらの徐福伝承がなぜこの地に存在するのか。その原点は、神奈川県藤沢市の妙善寺にある福岡家の墓碑であった。

（1）福岡家の墓碑に徐福子孫であることを明記³⁾（仮説5の証拠1）

福岡家の祖先が秦氏を称し、徐福の子孫であることを明記している。そこで神奈川県に存在する徐福に関連する書物、伝承、記録を探り求めたところ、次のような諸事実の存在が判明した。即ち、神奈川県藤沢市の妙善寺にある福岡家の墓碑には、同祖先が秦氏を称し、徐福の子孫であることを明記されている。そして、祖先は秦野から来たとされている。一方、富士山麓に土着した徐福一行の子孫が、延暦19年（800）に富士山の大噴火が起こり、大きな被害を受け、やむなく秦野に移住したとの伝えがある。そのために宝来山や宝来下という地名が伝えられたという。

（2）秦野市には古代中国から来た渡来神が神社に祀られている⁴⁾（仮説5の証拠2）

秦野市横野にある唐子神社の御祭神（からこ神）は、富士山から丹沢山系を越えてきた、徐福の子孫であることを伝承していた。また乳牛（ちうし）の旧からこ神社にも、大磯から上陸した、古代中国からの渡来神が祀られていた。

秦野市蓑毛の大日堂（宝蓮寺）の縁起書には、大日堂の五大尊が徐福に関係することを伝えていた。秦野宝蓮寺と徐福および無学祖元の関係として、秦野市蓑毛・臨濟宗宝蓮寺の縁起書には、徐福や秦始皇帝の話が出てくる。

「後秦の始皇帝29年（BC220頃？）沙門室利ら18人が印度から辰旦（秦国）にきた。五大尊、金剛力神などの秘佛をもち来たが、そのとき始皇帝は異俗を嫌って、彼らを殺そうとした。そこで、「徐福」は、「公、仙道を求め欲するなら、殺してはなりません」と上奏し、大悲五大尊の力により宝物は皆大公徐福に遣わされ、18人は皆印度に帰ることができた。その後、秦の始皇帝の裔が彼の五大尊悲像を守護して、80余年にして応神天皇15年甲辰に佛宝物大悲像、五大尊と共に、秦苗裔であると申して本朝に渡来した。

秦の苗裔は、東州に下向して、千手観音像を駿河国の有度山に、五大尊は相模の国、足柄上郡に安置された。つまり、徐福情報は応神天皇のころから秦野に存在していたようだ。

（3）相模原市・栗原家に徐福持参の鉄鍬が存在⁵⁾（仮説5の証拠3）

相模原市（旧藤野町）・栗原家に徐福持参の鉄鍬と伝え、徐福木像？（S39年焼失）が存在していた。

(4) 相模の大山阿夫利神社のご祭神は徐福？

大山阿夫利神社の御祭神は、大山祇命である。この神は様々の神社仏閣の神仏の中で、徐福を祀るとされる、佐賀県金立神社の祭神と同一とみなされている。

(5) 相模一宮・寒川神社のご祭神は徐福？

寒川神社のご祭神は寒川彦命であるが、この名称は大山祇命と同神であり、大山祇命が徐福であるとすれば、寒川彦も徐福を表している。富士古文献によると富士山麓を流れていた古川の名称であり、徐福文献と称される「宮下文書」が存在し、徐福伝承を伝える宮下官司らは、延暦年間に起きた富士山の噴火を逃れて、相模川下流に移動したと記す。

(6) 三浦半島秋谷地区発見の丸石は徐福船団が使用した？

秋谷地区で多数発見された丸石は徐福船団が使用した船の安定化バラストではないかと考えられている(逗子市の郷土史研究家の赤埴和晴氏の説)。八丈島周辺にも同様の丸石が発見されており、徐福伝説があることから、日本の太平洋岸にたどり着いた一行が難破して各地の海岸に上陸したことが考えられる。南足柄市にも丸石が多出し、この地域の初代統治者は、シナツヒコと呼ばれ日本神話の「風の神」と同名である。

(7) 丹沢山系の麓、秦野市の寄木地区に古代中国から入植者

秦野市の寄木地区のジタンゴ山という小山(700m級)の名称は「震旦郷(シンタンゴウ)」から、訛って付けられたものと伝えられている。富士古文献に「支那震丹国皇代曆記」という文献があり、震丹とは、古代中国の名称であったという。つまり、秦野市の山奥には、古代中国から渡来した人々が住みついていたことを、暗示する山名である。

(8) 道志川の伝承は大山が徐福一行の開発であることを証言⁵⁾(仮説5の証拠4)

富士山東麓の道志川の伝承は大山が徐福一行の開発であることを証言していた。江戸時代に大山講を通じて大いに賑わった基点になったのが伊勢原町であるが、「伊勢原町勢誌」p132には、次のような記載があった。

「大山の山岳信仰に関連して、山梨県の道志村に残る伝説で、秦の徐福が蓬莱山なる富士に不老不死の仙薬があると聞き及び、五百人の童男童女を使わして求めたけれども得ること難く、たとえ幾年ついやそうともこの秘薬を手に入れぬ内は、帰国を許さずと厳命した。やむなく五百人の使者は土着して、相州大山までの連山を訪ね探して秦野に移住し、御正体山・地藏ヶ岳・薬師ヶ岳・丹沢山から大山を、神仏に祈り探して、この地を蓬莱山と呼んだ。しかしめざす仙薬は遂に見当たらず、五百人の男女はここに帰化してしまった。」

つまり、徐福一行は、リーダー徐福の厳命で、不老長寿の仙薬を求めて、秦野に移住し、

蓬莱山と呼んで帰化してしまった、という。

4. 徐福の事を伝える古史古伝（仮説6）

日本の古代文献の中には、「古事記」以前の書と呼ばれて、内容に古代日本の伝承が含まれている文書がある。古史古伝には、「富士古文献（宮下文書）」、「物部文書」、「竹内文書」、「九鬼文書」、「秀真伝」、「三笠紀」、「先代旧事本紀」、「上記」、「先代旧事本紀大成経」などがある。尚、物部氏は徐福集団の構成要員であったという賀茂氏の伝承がある。

4.1. 「物部文書」（秋田物部文書）

本文書によれば、ニギハヤヒ命が東北日本海沿岸の「鳥海山」に降臨したことになる。これには三河の物部氏が関与している。「物部文書」が注目されるのは、物部氏が蘇我氏との戦いで敗れ、「神代の万国史」の写しである「物部文書」をもって、東北地方に逃れたと「九鬼文書」に記されていたからである。このとき諏訪に逃れた中臣氏一族が持参した写しの一部が「九鬼文書」で、更に前代の武烈天皇の時代に失脚させられた竹内一族（平群真鳥の子孫）が秘匿していた「神代の万国史」の一部が「竹内文書」である。

「物部文書」が公開されたのは昭和59年であり、天地創成、物部氏の祖ニギハヤヒ命の降臨神話、東国の国譲り、神武東征、蘇我氏との抗争、物部氏の秋田亡命などが記載されている。「先代旧事本紀大成経」は「物部文書」の一つである。物部氏が、徐福一行の子孫であることが事実であれば、「物部文書」には当然、徐福一行およびその子孫の伝承が記されているものといえる。

4.2. 「富士古文献」（宮下文書）

本文献には、徐福が書き写したことが記載された文献が存在している（**仮説6の証拠1**）。すなわち、神皇第7代孝霊天皇の世73年(BC213)、秦の方士徐福率いる85隻の大船団が、紀伊熊野に到着し、天皇が派遣した竹内宿祢を案内者として、富士山麓に落ち着いたという。

徐福は、富士の阿祖山太神宮の神官から、神代文字で記された古代記録を見せられ、その内容を漢文で書き写したことから「徐福文献」という名が生じた。三輪義熙は、大正10年に富士古文献を整理集成して、「神皇紀」という書名で内容を紹介した。これを三輪本と呼ぶ場合がある。本書は、日本民族の原郷を古代ユーラシア大陸の中央に置き、その原日本人が日本列島に移動定着してきたこと、王朝交替、異国の侵略、大異変を克服して、神武王朝を成立させるまでの民族古代史を語っている。ウガヤフキアエズ朝は51代続いたこ

とになっている。つまり「富士古文献」の初期編纂（徐福12史談）は、徐福一行の手によるものであると云える。

4.3 富士古文献の改定から「記紀」へ

秦の方士徐福が、富士の阿祖山大神宮の神官が語った古代史を聴き、その深さに感嘆するとともに、その貴重な記録の散逸するのをおそれ、改めて漢字で筆録したものが「富士古文献」とされている。岩間尹氏（古代豪族三浦氏の家伝書＝富士古文献を集成した古代日本史本）によれば、収録されている「暦代記」他数篇は、孝元天皇がみずから編集した古代実録である。それを「書き作り記し置」いたのが徐福である旨を、宮下源太夫義仁によって「謹書」されている。ところで、人皇三十六代天智天皇10年（671）8月に、朝廷（近江京）から「中臣藤原物部麿」なる人が富士山麓を訪れて、富士古文献（宮下文書）を読み「作正字津須」という。つまり徐福筆録とされる文書の文章を正して、これを新たに写し改めたという。「作正」とは現代語でいえば「改訂」にほかならない。

宮下文書を「作正字津須」人物・中臣藤原物部麿とは、岩間尹によると、大織冠鎌足の「子」であるという。物部麿は、田辺武居を案内として富士山麓に赴き、その古記録を写した（天智10年（671））。この謎の物部麿は、大海人皇子（天武）側が政権（皇位）奪取後に備えて派遣した密使、藤原不比等である。藤原不比等はこの後、古事記、日本書紀の編集に携わり、日本の古代史は歪曲されることとなった。

5. 日本の古代史を検証する方法

歴史を事実として検証する方法として、1) 文献学的方法、2) 考古学的方法、3) 考古学と文献学の統合活用の3手法が考えられる。

1) 2) は従来より行われているが、最近の科学技術進歩によって、新たに開発された手法として、コンピューター画像解析手法が登場した。古代遺物からの文字情報採取する方法である⁶⁾。この文献によると、「史記」記述で後漢の光武帝が西暦57年に「漢倭奴国王」に授与した金印には、コンピューター画像解析で、「常根津日子命」との記銘が見つかった。

古代日本の碑石や石造遺跡記載の文字は、墨などの顔料で輪郭を描き、数ミリほどノミで彫り込んだ凹部に再び墨を入れたものが多い、という。その成果として、志賀島出土の金印に常根津日子命（安寧天皇の子）



の文字出現（コンピュータ画像解析で）と福岡県八女市の徐福一族の墓から徐福の文字発見がある。

池田仁三氏は、童男山一号墳石室墓碑名をコンピュータ画像処理によって解読したところ、その墓碑名から八女市東部の童男山古墳群において徐福一族の墓と出会ったとして、次のように書かれている。

史記の記述と墓碑墓年干支の整合から、それぞれの生存年は、徐福（西暦前 245～180）、福永（西暦前 209～170）、福萬（西暦前 181～126）、福壽（西暦前 157～113）となる。富士文書では徐福の子で兄弟となっている福永、福萬、福壽は徐福の子、孫、曾孫に当たるとみている。妻の福正女（ふくせいじょ）の墓は見つかっていないが、西暦前 219 年出航、西暦前 209 年、子・福永の誕生から、徐福に同行していたことが明らかで、調査未了の墳墓に葬られているだろう、という。

6. 徐福集団の存在形態の考察・「記紀」登場者への比定

6.1. 徐福集団は日本神話の神々となった（仮説 7）

徐福が歴史的人物と考えられるようになった今日、日本古代史に現れる人物（神々）に比定されている可能性は高い。近年発表された書籍やインターネットで開示された徐福の比定例を挙げると、次のようなものがある。

- ① 御中主神、②スサノオ神、大山祇、速玉男、八千矛、牛頭天王、タカオカミ、雷、カグツチ、ホムスビなど。
- ③大山津見命（大山祇命）④ニギハヤヒ命（饒速日命）天照国照彦天火明奇甕玉饒速日尊、天火明、大歳、大物主、別雷、金山彦、少彦名、事解男
- ⑤神武天皇、⑥熊野権現、⑦イザナギ神、⑧石上神宮祭神・布都（ふつ）、⑨寒川神 ⑨大歳（大年）神、⑩大山くい神、松尾社の神、山頂神、石の神、酒の神、大山祇の孫、賀茂神 ⑪大酒神、⑬ヒルコ神＝恵比寿神

6.2 スサノオ命＝大山祇命は徐福の子孫か

徐福の中国大陸在住時の名は、徐市（じょふつ）であり、史記に載る正式名は市（ふつ）と呼ばれていた。石神神宮は、「ふつの神」＝「（徐）市」とその子孫を祀っていたことになる。スサノオ命は徐福第一次東渡集団で済州島から、韓国半島に渡り、第 2 次、3 次東渡集団の後を追って、日本列島に渡来したと考えられる。即ち、「ふつの神」徐福はイザナギ神に比定され、その子の代にスサノオ神＝大山祇命が、孫の代にニギハヤヒ命が現れることになった。

東三河に存在した古書「牛窪密談記」⁸⁾には、徐福とイザナミ命が併記され、徐福＝イザナギ神であることを示唆していた（**仮説7の証拠1**）。徐福を祀る新宮の速玉神社のご祭神は「イザナギ神」である。近くにイザナミ命を祀る「花の窟」が存在する。

淡路島に岩戸神社があり、洲本のみけつの国食堂では、紫黒米という赤米を造っている

熊野速玉大社のご神像は、通常「徐福」と言われているが、神社の御祭神はイザナギ神で表現されている。また、国生みの原点の天の御柱廻りの陰陽左右回り方向は、徐福が求めた仙道（道教）の考え方と一致する。

木造熊野速玉大神坐像（文化庁提供）



徐福大神

イザナミ神

7. 結論

東海・関東の2地域の古記録、伝承、民話、遺跡等の調査を行うことによって、弥生時代の大陸文化の伝達者である徐福一行の日本渡来の可能性は極めて高いことが判明した。また、その存在形態は、記紀神話の神々として反映されている可能性が高い。

8. 参考資料

- 1) 前田豊、「古代神都東三河」、彩流社 pp12, 39, 59, 73, 197, (1996)
- 2) 碓井静照、「徐福の謎～徐福外伝～」、ガリバープロダクツ、p88, (2000) .
- 3) 前田豊、「徐福王国相模」、彩流社 pp20, 26, 35, 40, (2010), 「伊勢原町勢誌」p132
- 4) 奥野利雄、「ロマンの人・徐福」、学研奥野図書 H3.4.10、p119
- 5) 稲葉博、「神奈川県古寺社縁起一知られざる伝承・霊験譚」暁印書館、S63.4
- 6) 有賀訓、「衝撃古墳には被葬者の名前が書かれていた～古代史の定説が根底から覆される～」学研ムー2012年11月号No. 384, p73-83)
池田仁三 <http://www11.ocn.ne.jp/~jin/GAZ02.html>
- 7) 禹珪日、徐福フォーラム in 神奈川 2012、特別寄稿論文
- 8) 古書、「牛窪密談記」（伊勢神宮書庫保管）

以上